

九月十五日 嘱託本田幸之助(種竹)支那歴代美術、文学調査のため出発(自費)。

十月十三日 浅井忠、和田英作フランス留学を命ぜられる。

十八日 嘱託大村西崖(彫刻担任及び庶務、教務掛主務)西洋考古学授業兼務を命ぜられる。

二十六日 会計掛高橋昌長文庫掛を命ぜられる。

二十八日 田中重次郎雇を命ぜられる(月俸十五円。会計掛)。

十一月五日 教授久米桂一郎休職を命ぜられる(同月二十四日、向一ヶ年間仏国へ私費渡航の件許可され、二月二日出発)。

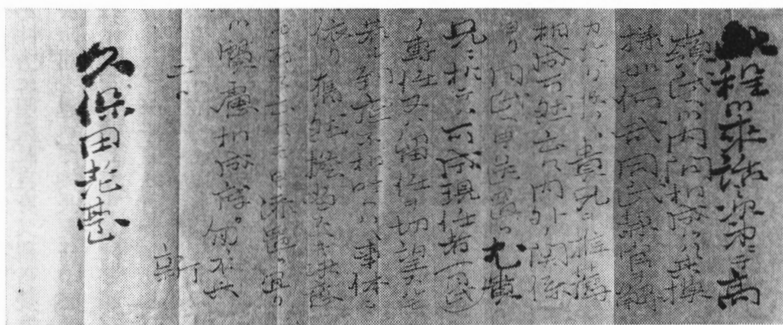
二十五日 小林万吾雇を命ぜられる。

十二月二十一日 田島応親へ仏語授業嘱託(一ヶ年二百四十円)。嘱託合田清渡仏のため解嘱。雇川上弘次郎病死。

二十三日 嘱託塩田真解嘱。

② 後任校長問題

明治三十一年十二月二十二日、女子高等師範学校校長兼本校校長の高嶺秀夫は兼官を解かれ、帝国博物館の主事兼本校幹事であった久保田鼎が本校教授兼任を命ぜられ、同時に本校校長心得を命ぜられた。この人選の背後に本校初代校長をつとめた浜尾新(明治二十三年貴族院議員、同二十六年帝国大学総長、同三十年文部大臣)の力が働いていたことは、左記の浜尾の久保田鼎宛書簡に徴して明らかである。



久保田鼎宛浜尾新書簡(久保田家蔵)

此程御來話之次第ニテ高嶺氏へ御内問相成候ハ、其模様如何哉 同氏兼官ヲ解カルヘク候ハ、貴兄ヲ推薦相成可然云々内外ノ關係ヨリ同氏へ申送置候 尤貴兄ニ於テハ可成現任者(同氏)ノ專任又ハ留任ヲ切望スルモ若シ到底不相叶候ハ、事体ニ依リ舊然擔当スヘキ決意モ有之云々モ申添置候 宜ク御賢慮相成度候 勿々不具

二日 新

久保田老臺

〔消印〕武藏 東京小石川
〔二字不明〕

□一年十月二日イ便〕封表

〔下谷区上野公園帝國博物館官舎 久保田鼎殿 親展〕封裏〔緘 東京小石川

金富町卅三番地 濱尾新〕

なお、不明字は文面から推して「卅」であったと考えられる。久保田家蔵)

久保田のそれまでの活動は非常に地味で、官等も高等官六等と割合低かったので、彼の校長としての資格の有無が取沙汰され、誰が正式の校長に就任するかをめぐってさまざまな臆説が乱れ飛んだ。翌三十二年の新聞にはこの問題を扱ったものが多く、そのうちの二、三を参考までに掲げておく。

〔上略〕 △美術學校長心得久保田鼎氏が、若しその心得を解いて新に校長を置くべしとせば、それは如何なる人の頭上に落ち来るべきか、京童の口善悪なくはやし立つるを聞けば、曰く森林太郎氏、曰く辰野金吾氏、曰く黒田清輝氏、曰く松岡壽氏、曰く長沼守敬氏、曰く小山正太郎氏、この外にも尙ほ薄暗き物蔭に自から任じてか他人に推されてか、孰れかは知らず、多少指目せらるゝものあるべし〔下略〕

（明治三十二年三月十二日『時事新報』所載「美術通信」署名△△生（大村西崖と寺山星川の交互執筆だが、この分は星川執筆））

●東京美術學校長の運動 同校教授黒田清輝夙に校長たらんとの野心あり 屢々運動を試みて毎に成らず 近日校長選任問題を以て厄介視せられたる高等商業學校が既に専任校長を得て一段落を告げたるを動機となし彼へ再び躍起となりて運動を始め先づ一方に於てハ本年卒業すべき生徒を使喚し校長心得の署名ある卒業證を得るハ卿等の不名譽なり 然れども現任久保田ハ心得以上の資格を得る能はず 此際須らく學識名望兼備の紳士を擧げて其任に當らしめざるべからずと暗に己を以て之に推し又他の方面に於て

ハ松岡小山等の教授〔松岡壽、小山正太郎をさすと思われるがいずれも本校教師ではなかった。——編者註〕を煽動し久保田排斥の後ハ三人共同して校務を處理することとせんなど説きつけて己の味方に引入れ自身又親ら幾度となく當局者の門を敲き尤もらしき理窟を述べて校長更任の必要を説き甚だしきハ過日の文相京都行に隨行を請ひて兎に角と媚を呈し猶且つ新聞に投書して美術學校長ハ黒田清輝最適任なりとの風説をさへ傳へしめ今日に至りてハ殆ど十二分の功を奏したるが如く自信し昨今頗る意氣揚々の風ありと云ふ 元來學校長の職ハ主として學校全體を統べ教員の進退を司るにあれば其人物に於ても亦専門の技術に偏したるものよりハ寧ろ所謂事務家の力を須つもの多きこと勿論なり 然るに今單に洋畫に熟〔「字不明」□(?)〕なりとの一理由を以て事務管理の上に於て曾て寸毫の經驗實力なき而も一身の素行修らずとの世評ある黒田を殊に當人の運動により採用するが如き事万一にも實現する場合とならば美術界ハ再び前年の紛擾を惹起すに至るべし 戒めざるべけんや

（明治三十二年四月三十日『万朝報』）

○美術學校長問題に就て 牛込鈍骨坊
東京美術學校長問題は又起れり、嗚呼年々歳々、紛擾の絶ゆることなく、神聖なる淨土界を汚すに至ては實にウキナス（美の神）に背反するの罪や大なりと云ふべし 盖し該校は他の専門學校と異り、特種専門學校なるを以て之が適任校長を得るは至難のことなりとす 只之が適任者を得んと欲せば、同校卒業生が他日學

識、技術、徳望の並び備はるの日を待たざるべからず、故に今日の場合には決して美術に精通せる人を任用するを要せず只だ教官、學生等を、よく威服するに足るべき人を任用すれば足れりとす。若し夫れ技術云々の點に至ては別に教頭並に幹事等に斯道の適任者を用ゆれば可なり

彼の從來の如き情實的の任免は實に神聖なる斯道の罪人を造るものと云ふべし、而して這般候補者として風聞に上れる松岡、小山、黒田等の如きは之れ權門に阿り、時勢に媚ぶる所謂巧言令色の野心家にして余輩は斷じて其の不適任者なることを絶叫して憚らざるなり 遮莫^{さもあらばあれ}、余輩は今日の美術學校長として濱尾新氏の最も適任なるを認む、上旨の任免を掌るもの速に同氏を校長に推せんことを切望するものなり

(明治三十二年四月十七日『日本』)

◎美術と音楽 美術學校々々長問題に關し黒田清輝氏の野心あるは事實なり 然れど氏の勢力は其の自信する程に大ならず 遠き未來は兎も角當分は決してさる事なかるべし

(明治三十二年五月四日『国民新聞』)

○東京美術學校長談 一昨日の教育彙報中に黒田教授が久保鼎^{〔久保田〕}を逐出して自身其後釜にならんと運動云々の項ありしに付或る美術界に精通の士は語りて曰く 彼久保鼎^{〔久保田〕}は表面より云ふも校長心得にして校長人選は其筋にても繼續問題のものたるは明かなるが去るにても黒田清輝は昨年岡倉派分離の時も校長に擬せられたるなど

の關係よりして自然此際の世評中に入り易きことならんが彼にして校長乗取の野心ありなど傳ふるは彼の身上及斯界の内幕に通ぜざるものゝ言若くは爲めにする所より出でたるものなるべし 華流社會に在る彼は何を苦み自ら進んで面倒臭き校長の地を望むべき 唯だ我意見を行ひ得て技術の發達を指導し往かるれば教授の任我樂みとする所なるべし 曩日の某紙に松岡壽も亦校長に色氣あるが如く傳へ續きて某紙は黒田氏若し校長ともならば松岡淺井氏等は大に抵抗すべしと記せるは彼此を對照して何となく黒田校長説を防禦する人達の消息を暗に傳ふるが如くにも見ゆべし 兎角は眼上の瘤の如く思はれ居ることとて黒田も迷惑の事といふべし 遮莫^{〔久保田〕}此問題も何時までぐづ附き居るべきにあらず 文部當局者は久保鼎若し其器ならんには之に專任すべし 然らずば改革意見を持し或は判し得る透明の腦を有し新思想を抱ける人を擧げよ 他界の人物拂底せば此等の資格ありて全校を統治し得らるゝ人ならんには黒も淺も松も且は寛敵先生も何か妨げあらん云々と語れり

(明治三十二年五月四日『毎日新聞』)

△東京美術學校長問題につき、逸早く筆を染めたるはわが美術通信なり、候補者といふ候補者を残らず算へ擧げて紙上に掲げたるもわが美術通信なり、この頃同校長問題はまたまた熾むに世上の話柄となれるが如し、されどわれ星座を觀て事を未然にさるとる天文博士ならねど、一夜北方の天を望むに星斗闌干物象舊に依つて其所を安むず、いまだ容易に校長席の動きさうにもあらざりき

△校長問題の起りしより以來、適宜の人を得むが爲めに誠實に幹旋の勞を執るものあり、身の程を辨へず自から醜骸を進めて候補者たらむと望むものあり、これ等もまた皆通信記者の疾く知るところなり、誠實に幹旋するものは美術界の爲めに嘉すべしと雖も、身の程を辨へざる鐵面皮漢は其醜厭ふべく其愚憫れむべし、校長問題には従前この清濁二流の差別あることを知らざるべからず

△或は曰く、黒田清輝氏もまた校長運動を爲したりと、黒田氏は畫家に似合はず小手の利く人なれば校長役位は易々たるものならむ、されどなみ／＼ならぬ技藝を持ちながら名譽にもあらぬ事務椅子を占めて、自から手腕を束縛するが如きは詰らなきことなり、黒田氏は唯白馬會の首領を以て名譽とすべし、わが曾て黒田氏に逢ひけるをりも語るにこの事を以てしたり、黒田氏は切にさる覺えなしと答へき、この言若し眞ならば黒田氏は寔に見上げた人なりけり〔下略〕

（明治三十二年五月十六日『時事新報』所載「美術通信」筆名△△生（この分は大村西崖執筆））

○今泉雄作氏の談話 東京美術學校教授今泉雄作氏は同學校生徒を引率し夏期修學の爲め去る十五日東京を出發し十七日より二十一日まで奈良の神社佛閣等を歴觀し古寶物書畫等を取調べ二十二日宇治に入り平等院黃蘗寺其他を參觀し二十三日來京して南禪寺銀閣寺其他東山の東北面を初めとし日々各社寺古跡名勝等を巡觀し居る由にて來る三十日生徒のみ歸校せしめ氏は尙ほ兩三日滯京する由 一夕社員は氏の旅寓なる相國寺玉龍庵を訪ひたるに氏は

滿面に笑を湛へて之を迎へ例によつて輕快の辯を奮へり 曰く、東京美術學校の校長問題ですか、ナーニ新聞で書立た程のこともありやしないが、兎角火をつけて騒がすものがあるのでア、大業に聞へるので、全體校長といふものは美術の事について夫ほど深く才幹があれば夫で澤山だ、之を一々其専門に亘つた智識がなくば校長になれんといへばそりや大變だ、ただ専門に筆とつたり刀とつたりしてゐる畫工彫刻家などでも、名人といふのは容易にありやしないのに夫を美術學校長は繪畫、彫刻、冶金其他一々知らんでは出來んとなれば大變さね、尤もこれ位の理屈は誰でも知っておるが、そこを例の火のつけ手が出て騒がすから困るのだ、エ、日本畫西洋畫の教授法についての問題ですか、之も同様で騒がし人はちやんと分つてゐる、ナニ西洋畫は教授について少し方法が具はつてゐて、即ち人間の眼は顔の三分の一の處にあるとか、足の釣合はどうだとかいふ位のこと、そりや夫に依つてもよしたまは依らんでもいゝ、何も大業に騒ぐ程のことは實にないので、それに畫家などの意氣地ないには困つたもので、一人の大家が一の傑作を出陳すれば、次の展覽會は必らず同様の摸倣した繪畫が多く出る、また或る團體によつては本畫にかゝる前に、先づ下畫を審査員に見せて、其指圖を受けて夫から揮毫する、また或團體では自己の團體より他から來たものは概して點數が尠ない、まア故意にそうするのでもなからうが、どうも外間からさういふ批難を受ける 夫で私がいふのだ、蕭白などは繪畫に於て邪道である、然し其邪道を押し通して繪畫は此なけねばならんと自ら信してやつ

たから、今日でも蕭白といつてもはやされてゐる、だから畫家などでも一の自信力を堅めて勇猛にやれば、譬令邪道にもせよ正道にせよ兎に角成功する、それでなければ批評家がこういふたといふては動き、大家がこう描いたといふては動き、生涯人に動かされどうして實につまらんです、云々、

(明治三十二年七月二十八日『京都日出新聞』)

③ 黒田清輝の学校改革案

本校は創設以来国粹主義的方針のもとに運営されてきたが、岡倉校長退陣とともに方針が不明瞭になり、混乱が生じた。そのため一刻も早く新しい方針を樹立して学校の体制をたて直す必要に迫られ、久保田校長心得がその任にあたることとなった。左記の新聞記事を読むと、彼が鋭意学校改革と取り組んでいたことがわかる。

△美術教育談 東京美術學校長久保田鼎頃日記者に語て曰く 美術學校が向來取んとする所の方針ハ暫らく措き單に予一個の希望を以てすれば先づ國內に於ける美術界の老大家を名譽講師若くハ名譽顧問等の名に依りて間接直接に學校に關係せしめ或る意味に於て所謂普通講座の制度を布き敢て修業年限等を限ることなく永久を期して大美術家を造出するの計畫を立つるを肝要なりとす 現在の如く僅々三四年の在學練習を経たるのみの學生等が早くも美術の神髓を會得したるかの如く誤解し旗幟を樹て、何派何流と自稱し意氣揚々世に特立せんとするが如き風あるに於てハ日本美術の發達を妨ぐるもの少なからざればなり云々 説得て肯綮を得

たりといふべし

(明治三十二年三月六日『万朝報』)

一方、このような時期に登場したのが黒田清輝の改革案であった。これは明治三十二年二月頃公表されたもので、その原本は今日所在不明であるが、幸いなことに明治三十三年三月二十五日から翌四月十七日までの間の『二六新報』に全文が掲載されているので内容を知ることが出来る。最初に掲載されているのは「美術教育の方針」で、次が「黒田清輝氏の美術教育に関する意見書」(原題の記載なし)である。前者については次のように執筆のいきさつが記されている。

美術界消息

○故外山博士と黒田清輝氏 是は寧ろ外山氏の逸事とするが穩當であらうが、亦美術界の一佳話として傳ふるに足るものであるから、本欄の店開きとして、先づ此事から始めることにした。

帝國大學では代々の大學總長の肖像油畫を額にして懸けて置く例なので外山氏もそれが必要になつた、所で此肖像は御當人の望みの畫工に囑む例になつて居るので、外山氏は黒田清輝氏を名差して頼んだ、但し相識の間柄では無かつた、が、已常黒田氏の畫風には意を傾けて居たので。

右は一昨年の十一月頃で、外山氏が例の圖書館通ひを始めた頃の話。黒田氏は右の申込に對し、貴囑謹んで承知した、然し拙者は他の畫工の様に現在の人を描くに其の寫真から書くことはお斷りせねばならぬと申送つた、所が外山氏は無論お囑みする以上は